

Prologue

はじめに

イグアナの情報活動

山内イグアナ研究所(以下YIL)では、1990年からイグアナの飼育を始め、95年10月、初のイグアナの飼育書「イグアナ イグアナ イグアナ」(以下イグアナ³)を出版いたしました。今までイグアナ専門の本というものがなかったためか、予想以上の反響をいただき、1年で完売となりました。

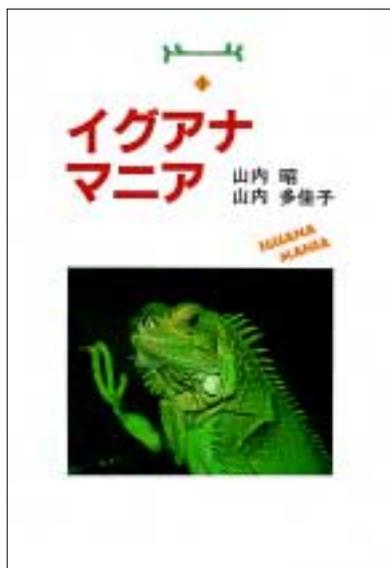
その後、さらにイグアナの繁殖などを経験し、イグアナ³をベースに加筆した「イグアナマニア」を97年6月に出版しております。ご愛読いただいた方々には、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

しかし、残念なことに諸般の事情によって2冊とも増刷が不可能となってしまいました。



「イグアナ³」95年10月発行

そもそも私どもは、イグアナを救うことを目的に始めたことですから、何とか継続して情報を提供したいと考え、新しいメディアの可能性を検討してきました。幸いなことに、イグアナマニアの製作は、印刷以外すべてYILで行ったため、必要な材料は電子化されて手元にありました。当面の間は、



「イグアナマニア」97年6月発行

コンピュータを利用できる方々に限られてしまいますが、それでも残されているデータを元に、配布可能な形に変換し、役立てていただければ幸いです。

このような経緯で、私どもの情報提供活動は、YIL-エキゾチックアニマルライブラリとして復活いたしました。

考え方としては、紙がCD-ROMになっただけで、内容はあくまでも「本」をつくるつもりで製作いたします。また、電子出版という形をとることによって、検索機能やカラー化など、紙の本では実現困難なことも可能となり、結果的に情報量を増やすこともできました。

イグアナについて

グリーンイグアナは、本来、ワシントン条約の付属書IIに記載されている貴重な生き物です。ブームとともに、値段が急落し、身近なペットショップやデパートなどに普通に置くようになってきたために、絶滅の危機にある生物だという認識が薄くなって来ていると思います。しかし、まだまだ地球上の希少な生物には変りなく、積極的に保護していか

ワシントン条約 (C.I.T.E.S.)

正式名称は「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」で、野生動物の保護を目的として制定されている。保護が必要とされる種は、絶滅の危険の高いものから順に付属書I～IIIに区分され、国際間での輸出入の規制を行っている。

イグアナ(Iguana iguana)は、付属書IIに分類され、取り引きを規制しなければ絶滅のおそれのある種とされている。イグアナの国外への移動の際は、輸出国の輸出許可をもらってから輸入国に確認申請を提出し、許可をもらう必要がある。日本では通産省の管轄。

く、積極的に保護していかなければならない生き物なのです。そのことを多くの方々に知っていただき、消費的に扱われることを阻止することも、私どもの目的の一つでした。

さらに、イグアナは貴重な生き物というだけでなく、人に良く馴れ、大変愛らしい生き物でもあります。正しく飼育し、お互いの信頼関係が確立されると、爬虫類でもこれほど楽しく人間とコミュニケーションがは

かれるのかということが分るようになるでしょう。爬虫類の中でも、イグアナはかなり頭の良い部類なのです。米国などのペット先進国では、今や「ペット」という言葉はあまり使わず、「コンパニオンアニマル」と呼ばれています。イヌ・ネコに限らず、爬虫類でも、他のエキゾチックアニマル(ハムスター、フェレットなど)でも、人間が一方的に飼育するのではなく、いかに家族として「共存」していくかを真剣に考えているのです。中でもイグアナは草食でおとなしく、鳴かず、臭いもないので、日本の住宅事情にもよくマッチしています。

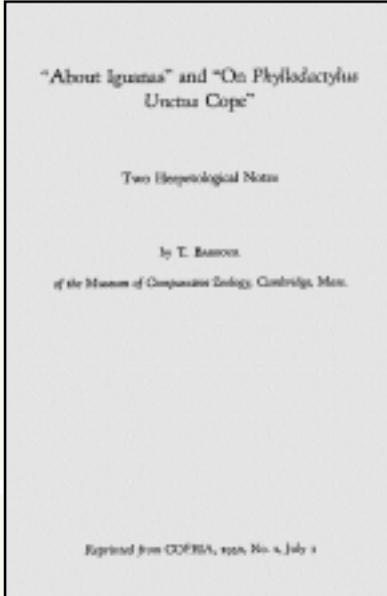
しかし、一般に信じられているように、イグアナの飼育はそれほど簡単ではありません。すでに熱帯・亜熱帯性の爬虫類の飼育経験がある人にとってはそれ程ではないのかもしれませんが、この手の生き物を初めて飼う人にとっては、今までの意識を改革しない限り、正しく飼育するのは相当困難であると、初めに申しておきましょう。できれば、最初にこの本を読んで、飼育管理にあてられる時間、環境整備の可能性を十分に吟味し、万全の飼育環境を用意してから、イグアナを購入して頂きたく思います。

そのかわり、正しい飼育環境、正しい給餌を行

うと、これ以上のペットは無いのではないかと
思えるほど、素晴らしいパートナーとなってく
れます。この地球は、人間だけのものではないの
です。これを機会に、動物と楽しく暮らせる環境
を考えてみましょう。

爬虫類の時代は、これからです。日本の場合
は、住宅事情が起因している場合が多いと思う
のですが、私たちのまわりでも、イヌ・ネコより
もイグアナやカメなどの爬虫類を飼う人が増え
てきました。それなのに、情報が少ない、あるい
はまったく無い、というジレンマが絶えずつき
まとっています。

米国などでは、50～60年
前から本格的にイグアナの
研究がなされており、論文
も多数書かれています。飼
育書も非常に多く、調査し
ただけでも20冊以上はあり
ます。さらに、近年のイン
ターネットのブームにより、
イグアナ関係のホームペー
ジも急速に増えてきました。
しかし、それらを利用でき
るのは、まだまだ一部の人



1932年発行のイグアナに関する論文

たちに限られています。

YILでは、1990年からイグアナを飼い始め、今では14匹にもなってしまいました。その間、多くの方々から問い合わせをいただきました。イグアナの勉強は永遠に続くと思いますが、少しでも皆様のイグアナ環境開発の一助になれば、日夜努力をしています。当研究所では、飼育

書の執筆、CD-ROMの製作、インターネットホームページの開設、電子メールやFAXでの飼育指導、飼育器具の販売など、皆様（とイグアナたち）のお役に立てるようさまざまな試みを行っています。

本書も、まったくこの通りにしないと飼えないということではなく、飼育法の一つの例として、御自分のライフスタイルに合わせた環境を確立していただければ幸いです。

皆様と、日本に住むすべてのイグアナの幸せを願って……



山内イグアナ研究所のホームページ
<http://yil.yamasite.com/>

reptile
environment

1998年5月1日

山内イグアナ研究所

山内 昭・多佳子

謝辞

この本は、私たちだけで完成できたものではなく、多くの方々の協力を得て作られたものです。この場をお借りして、お礼を述べさせていただきますと思います。(敬称略。50音順。)

渥美 比呂志・真理子

今岡 清

生方 則孝

江黒 真理衣

加藤 英幸

作田 仁

鈴木 哲也(鈴木動物病院)

谷本 慎太郎

霍野 晋吉(エキゾチックペットクリニック)

長屋 亘(鳥の病院)

矢追 義人

---Special Thanks to (alphabetical order)---

Breck Bartholomew(Bibliomania!)

M. R. Diaz(Duro-Test International)

Marie Eguro(Movie Star)

Robert Ehrig(International Iguana Society)

Brian Hardin(Hardin Productions)

Craig Hayslip

Melissa Kaplan

Lee Kelly(Zoo Med Laboratories)

Henry Lizardlover

Kelly Nolan(Iguana Production)

Susie Simmons(S.B.S Enterprises)

Steven Spitz(Big Apple Herpetological)

Desiree Wong

上記の方々には、イグアナに関する多くの助言をいただきました。この他にも、YILのアイコン会員の方々、インターネット上のYILメーリングリストに参加いただいているの方々、パソコン通信NIFTY SERVEの方々からはいつも様々な面で支えていただいております。ここに厚くお礼申し上げます。また、私たちの突飛な行動にいつも理解を示してくれた、われわれの両親ならびに親族に深謝の意を表します。

そして、最後に、最もお礼を言いたいのは、私たちが接した15匹のイグアナたちです。彼らに言葉が通じないのが残念でなりません。